

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25381151

研究課題名(和文)近代日本における父親の家庭教育参加に関する歴史社会学的研究

研究課題名(英文) A Sociological Study on the History of Fathers' Participation in Home Education in Modern Japan

研究代表者

多賀 太 (Taga, Futoshi)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：70284461

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、自叙伝の分析を通して、近代日本の家庭教育の実態を、とりわけ父親の関与のあり方に着目して明らかにした。従来の定説どおり、時代が下るにつれて家庭教育に対する母親の関与が増大する傾向は見られたが、必ずしもそれに伴って父親が家庭教育から撤退し稼得責任のみに集中するようになっていたわけではなかった。少なくとも昭和初期まで、父親も、進路指南、職業教育、知育、徳育といった家庭教育の多様な側面に比較的強く関与する傾向が続いていた。そうした傾向は、旧中間層のみならず、母親が教育の中心を担っていたとされる新中間層においても確認された。

研究成果の概要(英文)：Through the analysis of autobiographies, this study clarified the actual situation of home education in modern Japan, looking at fathers' involvement in that especially. In the previous studies, it was supposed that, as the time went by, the main players of home education had been replaced by mothers from fathers. However, this study has shown that, even mothers' involvement in home education had increased, fathers had never completely withdrawn from that and been rather actively involved particularly in career guidance, vocational education, intellectual training and moral education until early Showa period. This trend was observed not only in the old-middle class but also in the new-middle class.

研究分野：教育社会学

キーワード：教育社会学 家庭教育 父親 ジェンダー 歴史社会学 階層 私の履歴書 経済人

1. 研究開始当初の背景

本研究は、自叙伝の分析を通して、近代日本における家庭教育の実態の詳細を、特に父親の関与のあり方に着目しながら明らかにすることを目的として計画された。

近代日本の家庭教育に関する従来の研究においては、時代が下るにつれて母親が子育ての主たる担い手になっていき、父親は子育てにおいて周辺化されていったことが定説とされてきた(沢山 1990、広田 1999)。しかし、それらの先行研究には次のような課題が残されていた。

(1) 子育てにおける父親の周辺化という命題は、主として当時の医学書や育児書、家庭教育に関する雑誌や高等女学校の教科書などの規範的・理想的記述に基づいて主張されており、必ずしも当時の家族の子育ての実態に基づいて実証されたものではない。

(2) 家庭教育の実態を明らかにした研究(吉田 1953、小山・太田 2008)も見られるが、多くは明治末期までの趨勢か特定時点の特定事例のみを扱っており、大正期以降も含めた長期的趨勢や、家庭教育の社会集団間の差異や階層再生産戦略との関連についてはほとんど明らかにされていない。

(3) 各研究で焦点を当てている家庭教育の側面はまちまちであり、知育、徳育、体育、保育などの多様な側面が必ずしも分節化されないまま一括りにして扱われたり、必ずしも明確な定義を伴わないまま、子育て、教育、育ち、学びといった包括的な用語で論じられたりする傾向にあるため、各知見の比較や総合が容易ではない。

2. 研究の目的

上記の問題意識に基づき、次の2点を研究の目的として設定した。

(1) 家庭教育の具体的実践内容を分節化したうえで、近代日本において家族の誰が、どのような家庭教育を担っていたのか、とりわけ父親はどのような家庭教育に携わっていたのか、そうした傾向は、時代によってどう変化したのかを明らかにすること。

(2) 家族の階層再生産戦略を分節化したうえで、家庭教育のあり方が、社会集団によってどう異なっており、また各集団の階層再生産戦略とどのように関わっていたのかを明らかにすること。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するため、次の手順で研究を行った。

(1) 対象の選定と抽出

分析対象に、日本経済新聞社編「私の履歴

書「経済人」シリーズ全38巻を選定した。自叙伝を分析対象としたのは、公的な記録としてほとんど残されることのない家庭教育を含む私的営みとしての著者の生活実態が具体的に記録されている貴重な資料だからである。本シリーズを取り上げたのは、243人分という収録作品数の豊富さ、約60年という執筆者の出生年の広がり、そして、晩年に同類の社会集団に属するようになった著者が同じ読者層を想定して共通したフォーマットで執筆した作品のコレクションであり比較したい条件以外の諸条件がかなり統制されている点などにおいて、本研究の目的に最も適した資料だからである。

これら全243作品の中から、本研究では次の方法で3種類の標本を抽出し、実際の分析対象とした。

標本A：同じ出生年の著者の作品の中から、作品が最も早い時期に新聞に掲載された著者1人の作品だけを抽出して構成された、1875(明治8)年生まれから1933(昭和8)年生まれまでの57人分の作品群。

標本B：逆に、同じ出生年の著者の作品の中から作品が最も遅い時期に新聞に掲載された著者1人の作品だけを抽出して構成された57人分の作品群。

標本C：大正期に相当する1912年から1926年に生まれた60人の著者の作品群。

(2) 事例 - コード・マトリックスの作成

各標本について、次の手順で事例 - コード・マトリックス(佐藤 2008)を作成し、分析のためのデータベースとして用いた。

事例シートの作成：分析対象とする自叙伝の全テキストから、家庭教育の様式とその担い手に関する記述部分、ならびに著者の社会的属性や時代背景に関する記述部分を抽出し、1人1シートに記録していった。

セグメント化：そうして得られた記述部分を基本的な情報の単位(セグメント)に区分けした。

コード化：区分けされた各セグメントに対して、その記述内容を一次元高い抽象度で指示する概念(コード)を付与した。これにより、次節の研究成果で記す家庭教育のカテゴリーと子どもの地位達成戦略のタイプが得られた。

事例 - コード・マトリックスの作成：自叙伝の著者を「列」(縦軸)、著者の属性や経験した出来事を「行」(横軸)とする「行列」の形で、各セルに該当するセグメントの情報を集約して記入した。

(3) 家庭教育実践の量的・質的分析

上記マトリックスに基づき、各カテゴリーへの該当事例数をカウントする方法で、具体的な家庭教育実践の担い手や時代的変遷、ならびに家庭教育実践と階層再生産戦略との関連やそれらの社会集団間での差異の傾向を量的に把握した。さらに、各家庭教育実践

や各階層再生産戦略別に典型的な事例を複数取り上げ、その著者の置かれていた当時の様々な社会的条件の全体関連的な文脈のもとで、それぞれの実践が採用された背景や理由についての考察を行った。

4. 研究成果

(1) 家庭教育のカテゴリー

1875年から1933年までの同一年生まれの著者の作品をまんべんなく含む標本Aを用いて、セグメント化とコード化の作業を行った結果、個別具体的な家庭教育実践が、表1に示す上位3×下位3の計9カテゴリーに分節化された。

表1 家庭教育のカテゴリー

上位カテゴリー	下位カテゴリー
進路形成	進学指南
	職業指南
	職業教育
知育	学識伝達
	文化伝達
	外部資源利用
その他	徳育
	体育
	世話

(2) 家庭教育の内容と担い手の趨勢

同じく標本Aを用いて、家族の誰が、9種の家庭教育実践のどれを行っていたと言及されているかについて、執筆者の世代の違いに伴う趨勢を分析したところ、次の4つの傾向が明らかにされた。

家庭教育の担い手としての言及は、全体的には母よりも父の方が多く、世代が若くなるにつれて母への言及頻度が高くなる。

進路形成への関与については、いずれの世代でも圧倒的に父親への言及が多い。

知育の担い手としては、明治中期生まれまでの世代では圧倒的に父親への言及が多いが、明治末期生まれになると父への言及と母への言及の割合が拮抗してくる。

徳育の担い手としては、大正期後半生まれ以降の世代になると母への言及が増えるが、父も依然として重要な役割を果たしているとして言及され続けている。体育は父親、保育/ケアは母親という明確な相違が見られるが、これらへの言及は少ない。

(3) 自叙伝の社会構築性に関する検証

「執筆者自身によって回顧的に構築される個人史」であるという自叙伝の性質に鑑みると、標本Aの分析から確認された、出生年代の変化に伴う家庭教育への言及のされ方の変化は、実態として出生年代によって家庭

教育の経験が違ふことの反映よりも、執筆時の時代的風潮の影響を受けた執筆スタイルの違いである可能性が考えられた。そこで、執筆時の時代的風潮がテキストにもたらすバイアスの程度を検証するために、1875年から1933年までの同一年生まれの著者の作品の中で、執筆時期が最も遅かった57作品を抽出した標本Bを用いて、標本Aと同様の分析を行い、両者の結果を比較した。

その結果、標本Aに比べて標本Bでは執筆された年が平均して約11年遅かったが、家庭教育への言及のされ方に関しては、両標本の傾向はほぼ同じであり、唯一の違いといえば標本Aに比べて標本Bで父と母への言及回数が1割程度多いことくらいであった。したがって、「私の履歴書 経済人」シリーズにおいては、10年程度の執筆年の違いでは、執筆時の時代的風潮が自叙伝における家庭教育に関する記述の仕方と与える影響はそれほど大きなものではなく、世代による記述内容の変化を世代による実際の経験の変化の反映であると見なすことの妥当性が高められた。

(4) 家庭教育の内容と担い手における階層間の差異

次に、子どもの教育に熱心な「教育家族」の先駆けとされる新中間層が拡大する大正期に焦点を絞り、大正期生まれの全著者60名分の事例からなる標本Cを分析対象として、家庭教育のあり方と家族の階層再生産との関連についての分析を行った。

各事例を、子どもに直接引き継ぐことのできる職業的家産を有する「旧中間層」28事例と、それを有しない「新中間層」32事例に分類し、両集団間で、家族の誰が、どのような家庭教育実践を行っていたと言及されていたのかについて比較したところ、次の点が見られた。

「旧中間層」では、「新中間層」に比べて職業教育や職業指南に関する記述が多く、母による教育への言及は徳育と世話を除けばきわめて少なかった。それに対して「新中間層」では、「旧中間層」に比べて進学指南や文化伝達への言及が相対的に多く、母が進学指南や学識伝達にもある程度関与している傾向が見られた。

(5) 子どもの地位達成戦略

さらに、標本Cを用いて、子どもの地位達成戦略について、各事例のコード化とセグメント化を行った結果、表2に示す5つのタイプに分類することができた。両階層間で比較を行った結果、「旧中間層」では、父親の職業的地位をそのまま継承させようとする「特定地位継承」戦略が主流だったのに対して、「新中間層」では、父親の職業的地位を継承させることにこだわらず、学歴・資格取得を通じた地位達成を促す「一般的地位達成」戦略が主流であることが確認された。

表2 子どもの地位達成戦略タイプ

タイプ名	定義
① 特定地位継承	父親の職業的地位をそのまま継承させようとする
② 特定地位提供	父親の職業的地位は継承させる意図はないが、家業に迎え入れようとする
③ 特定地位達成	直接継承できない父親の職業的地位に就かせるために学歴・資格取得を促す
④ 一般的地位達成	父親の職業的地位を継承させることにこだわらず、学歴・資格取得を通じた地位達成を促す
⑤ その他	「放任主義」や具体的記述のないもの

(6) 階層再生産戦略の階層間の差異

前項の地位達成戦略タイプと、天野郁夫(1983)が提唱した学校教育・学歴の機能類型(地位表示機能/地位達成機能)を援用し、両社会集団間の差異を分析した結果、次の点が明らかになった。

「旧中間層」では、主として「特定地位継承」戦略のもと、父親主導で職業指南と職業教育を中心とした家庭教育が顕著であり、学歴は垂直レベルでも水平レベルでも多様であった。学校教育は、大規模事業者層にとっては主として地位表示の手段でありながら投資としての性格も有しており、零細事業者層にとっては積極的な投資であり地位形成手段としての性格を強く持っていた。

「新中間層」では、主として「一般的地位達成」戦略のもと、父親主導の教育方針のもとにありながら、母親が日々配慮の行き届いた家庭教育を担う傾向が見られ、主として学歴取得を最優先しながらも、子どもの純真さを尊重したりしつづけに気を配ったりしながら、必ずしも職業に直結しない文化伝達も進んで行われる傾向が見られた。結果的には東大法学部を中心とする官立大学への進路がとられており、学校教育は明らかに地位形成手段としての性格を強く持ち合わせていた。

(7) 総合的考察

上記の知見を総合した結果、教育的配慮をめぐらせた家庭生活の中で母親が日々の家庭教育を担うという「教育家族」の典型が、旧中間層よりも新中間層でより顕著に確認されたという点で、先行研究で提唱されていた命題は支持された。

しかし同時に、本研究からは、両階層とも、当時の教育戦略の主導者は、多くの場合母親ではなく父親であったことも明らかにされた。「母の手による家庭教育」という規範が新中間層に浸透したとされる大正期以降も、父親は稼得責任のみに集中していたわけではなく、積極的に家族における教育に関与している様子が明らかにされた。この点は、大正期以降に生まれた著者が、父親としての自分自身のあり方を振り返り、家庭や子どものことは妻に任せきりだったとしきりに語るのとは対照的であった。

こうした当時の父親の家庭教育への関心

の高さと関与の深さを生じさせた背景に関する考察が行われ、父親たちが、戦前の「家」制度のもとで家長として「家」の継承し発展させる責任感や、純粋に子どもをかわいがりその成長を支援することに喜びを見出すという近代家族的なエトスを内面化していた可能性、ならびに階層再生産戦略における有効な教育資源が母親よりもむしろ父親に集中していた可能性が指摘された。

引用文献

- 沢山美果子、教育家族の誕生、教育誕生と終焉、藤原書店、1990、108-131
 広田照幸、日本人のしつけは衰退したか、講談社、1999
 小山静子・太田素子編、「育つ・学ぶ」の社会史、藤原書店、2008
 吉田昇、自伝による家庭教育の研究、野間教育研究所紀要、第10輯、1953、245-282
 佐藤郁哉、質的データ分析法、新曜社、2008
 天野郁夫、学歴の地位形成機能と地位表示機能、教育社会学研究、第38集、1983、44-49

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

- 天童 睦子・多賀 太、「家族と教育」研究の動向と課題 - 家庭教育・戦略・ペアレントクラシー、家族社会学研究、査読無、28(2)、2016、224-233

Taga, Futoshi, 'EU Countries' Implications for Promoting Fathers' Participation in Parenting in Japan, 家族社会学研究、査読無、28(2)、2016、207-213

多賀 太・山口 季音、近代日本における家族の教育戦略に関する一考察 - 旧中間層と新中間層の比較を中心に -、関西大学文学論集、査読無、第65巻、第3-4号、2016、135-163、<http://kuir.jm.kansai-u.ac.jp/dspace/handle/10112/10366>

多賀 太、近代日本における家庭教育の担い手に関する一考察 - 「私の履歴書 経済人」からの抽出事例を用いて -、関西大学文学論集、査読無、第64巻、第3号、2014、27-52
<http://kuir.jm.kansai-u.ac.jp/dspace/handle/10112/10367>

〔学会発表〕(計 12 件)

多賀 太、変容する「ジェンダーと教育」のポリティクス、日本教育社会学会第 68 回大会、2016 年 9 月 17 日、名古屋大学 (愛知県・名古屋市)

多賀 太、「父親の育児参加」の社会学 - 課題と展望、日本家族社会学会第 26 回大会、2016 年 9 月 10 日、早稲田大学 (東京都・新宿区)

Taga, Futoshi, Father as an Educator: Family Strategy for the Education of Children in Japan, Seminar on Masculinity Studies, August 24, 2016, University of Gothenburg, Gothenburg (Sweden)

多賀 太、父親の子育て参加と親密性の変容 - 男性学の視点から -、日本心理学会大会第 79 回大会、2015 年 9 月 24 日、名古屋国際会議場 (愛知県・名古屋市)

多賀 太・山口 季音、近代日本における家庭教育の担い手に関する考察 (2) - 大正期生まれの経済エリートの事例から -、日本教育社会学会第 67 回大会、2015 年 9 月 10 日、駒澤大学 (東京都・世田谷区)

Taga, Futoshi, What Can Japan Learn From Experiences in Welfare-advanced Countries to Achieve Gender Equality in Parenting, 日本家族社会学会第 25 回大会、2015 年 9 月 5 日、大手門学院大学 (大阪府・茨木市)

Taga, Futoshi, Change and Continuity in the Definition of Happiness for Japanese Middle-class Men, Japanese and Australian Masculinities Symposium, March 17, 2015, Sydney Business School, Faculty of Business, University of Wollongong, Sydney (Australia)

多賀 太、男性学の視点とサラリーマン・ヘゲモニーのゆくえ、第 87 回日本社会学会大会、2014 年 11 月 23 日、神戸大学 (兵庫県・神戸市)

多賀 太、近代日本における家庭教育の担い手に関する一考察 - 経済エリートの自叙伝を資料として -、日本教育社会学会第 66 回大会、2014 年 9 月 13 日、愛媛大学・松山大学 (愛媛県・松山市)

Taga, Futoshi, How Happy Are Salarymen: Continuity and Change in the Meaning of Well-being for Japanese

Middle-class Men, International Conference: Deciphering the Social DNA of Happiness: Life Course Perspective from Japan, May 24-26, 2014, University of Vienna, Vienna, (Austria)

多賀 太、近代日本における父親の家庭教育に関する一考察、関西大学教育学会、2013 年 12 月 14 日、関西大学 (大阪府・吹田市)

〔図書〕(計 1 件)

多賀 太、学文社、男子問題の時代? - 錯綜するジェンダーと教育のポリティクス -、2016、240

6. 研究組織

(1) 研究代表者

多賀 太 (TAGA, Futoshi)

関西大学・文学部・教授

研究者番号: 7 0 2 8 4 4 6 1

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

山口 季音 (YAMAGUCHI, Kioto)